

卑弥呼の時代を解き明かす? 淡路島

弥生後期の大山間地集落群 淡路市舟木遺跡から弥生期の鉄製ヤスが出土

海の民や北部九州とのつながりを示す? 2018.3.23. 神戸新聞より

本年1月ご紹介した淡路島の北部津名丘陵 弥生後期の大山間地集落群の中心集落遺跡淡路市舟木遺跡から「かえし」があるなど弥生時代の北部九州の鉄器加工の先端化技術で作られた鉄製のヤスが出土した。

国生み神話があり、国内最大級の弥生の鍛冶工房村五斗長垣内遺跡の出土。そして、時代の大転換を示す多数の初期埋納銅鐸松帆銅鐸の出土している淡路島。弥生時代から古墳時代への大きな転換期 卑弥呼の時代に「淡路島が重要な役割を果たした」との期待がにわかに高まってきた。

国づくりが始まる当時の最重要課題は朝鮮半島の鉄素材の確保とその交易の覇権。

そんな中で、淡路島の北部津名丘陵には、各種生産工房を有し、交易を生業とすると考えられる淡路市「舟木遺跡」を中心とする大山間地集落群の存在が明らかになってきた。

新しい時代を開く集落群として注目を集め、淡路島の海岸部には野島や三原の海人とよばれる瀬戸内海を庭とする海の民がいることもあって、「淡路島の交易ネットワークが卑弥呼の時代の謎を解き明かすのではないか?」との期待の元にわかに脚光を浴びている。

そんな昨今 淡路島の発掘調査に注目が集まる中、3月23日淡路市舟木遺跡で弥生時代の「かえし」のある鉄製ヤスが、出土し、北部九州から持ち込まれたと考えられるとの新聞報道が関西に大きく流れた。

金曜日 神戸新聞 (第3種郵便物認可)

# 弥生期の鉄製ヤス出土

淡路市舟木にある弥生時代の山間地集落遺跡「舟木遺跡」の発掘調査で、鉄製のヤスが見つかり、同市教育委員会が22日、発表した。弥生期の鉄製ヤスの出土は山陰地方や九州北部で例があるが、近畿では初めてという。(渡辺裕司)

標高約150mの山にある同遺跡から漁具の鉄器が見つかったことで、同市教委は鉄器流通の背景に、海を往来しながら生活していた「海の民」のネットワークがあったことを示す貴重な資料とみている。

出土した鉄製ヤスは長さ16.5cm、幅は最大1.4cm。全体がさびで覆われていたが、エックス線写真で分析した結果、先端から約1.5cm下方に「かえし」が見られた。ヤスや釣り針にかえしをつくるには高度な技術が必要といい、鉄器製造が盛んだった九州などから持

## 高度な技術 九州などから流通か

今回の調査で淡路市教委は、3次元レーザーを使って上空から同遺跡の測量も実施。地表面の起伏を詳細に分析した結果、遺跡の範囲が従来より北に約300m広がる可能性があることも分かった。

調査成果の報告や出土遺物の展示は25日午後1時半から、同市小倉の北淡震災記念公園セミナーハウスである。申し込み不要。同公園 ☎0799・82・3400

ち込まれた可能性がある。また、2016年度調査の出土品から、鉄製の釣り針も確認された。弥生期の釣り針の出土は、県内では会下山遺跡(芦屋市)に次いで2例目という。

弥生期の鉄製ヤスや釣り針は、山陰や九州北部で出土する例が多い。愛媛大東アジア古代鉄文化研究センターの村上恭通センター長は「山陰は九州から鉄製漁具を受け入れ、漁民が鉄器の交易を促進した」と分析。今回の発見で、漁具が日本海側だけでなく「瀬戸内側を伝わって来た可能性もある」と指摘する。

2018.3.23. 神戸新聞 朝刊

このの評価はまだこれからであるが、下記注目点

- ◆ 出土した鉄製「ヤス」には「かえし」があり、当時の北部九州の先端技術。北部九州から持ち込まれた。また、今回のかえしのある弥生期やすりの出土は近畿で初めてであるが、北部九州・山陰で出土例。
- ◆ 淡路島の山間地集落群は生産工房があり、周辺との交易を生業とする。この中心舟木遺跡からの出土から、海岸部の「海の民」とのつながり・ネットワークが見えてくる。これからも興味津々。淡路島の大山間地集落群とその中心舟木遺跡です。

兵庫県淡路市舟木にある弥生時代の山間地集落遺跡「舟木遺跡」の発掘調査で、鉄製のヤスが見つかり、同市教育委員会が22日、発表した。弥生期の鉄製ヤスの出土は山陰地方や九州北部で例があるが、近畿では初めてという。標高約150メートルの山上にある同遺跡から漁具の鉄器が見つかったことで、同市教委は鉄器流通の背景に、海を往来しながら生活していた「海の民」のネットワークがあったことを示す貴重な資料とみている。

出土した鉄製ヤスは長さ16・5センチ、幅は最大1・4センチ。全体が錆で覆われていたが、エックス線写真で分析した結果、先端から約1・5センチ下方に「かえし」が見られた。ヤスや釣り針にかえしをつくるには高度な技術が必要といい、鉄器製造が盛んだった九州などから持ち込まれた可能性がある。

また、2016年度調査の出土品から、鉄製の釣り針も確認された。弥生期の釣り針の出土は、県内では会下山遺跡（芦屋市）に次いで2例目という。

弥生期の鉄製ヤスや釣り針は、山陰や九州北部で出土する例が多い。愛媛大東アジア古代鉄文化研究センターの村上恭通センター長は「山陰は九州から鉄製漁具を受け入れ、漁民が鉄器の交易を促進した」と分析。今回の発見で、漁具が日本海側だけでなく「瀬戸内側を伝わって来た可能性もある」と指摘する。

今回の調査で淡路市教委は、3次元レーザーを使って上空から同遺跡の測量も実施。地表面の起伏を詳細に分析した結果、遺跡の範囲が従来より北に約300メートルほど広がる可能性があることも分かった。

調査成果の報告や出土遺物の展示は25日午後1時半から、同市小倉の北淡震災記念公園セミナーハウスである。申し込み不要。同公園TEL0799・82・3400



出土したヤス エックス線で撮影した画像には「かえし」があることが分かる（淡路市教委提供）。

**参考1:【和鉄の道・Iron Road】淡路市舟木遺跡を中心とした弥生後期の大山間地集落群**

<http://www.infokkna.com/ironroad/2017htm/iron13/1702funaki00.htm>

**参考2 神戸新聞 Next 2018. 3.23. 弥生期の鉄製ヤス出土 淡路で近畿発**

<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/201803/0011093126.shtml>

**参考3 神戸新聞Next 2018.3.3. 淡路で古代史シンポ 海人や国生み神話に新視点**

<https://www.kobe-np.co.jp/news/sougou/201803/0011034677.shtml>